鶏肉情勢

項目	内容
供給	1. 国内 (1) 生産・処理動向調査((一社)日本食鳥協会令和4年1月末実施)によると1月の推計実績は処理羽数59,586千羽(前年比102.4%)・処理重量180.2千ト(同102.7%)となった。前月時点の計画値より処理羽数は2.4%下方修正し、処理重量も0.4%下方修正となっている。寒波の影響に加え、処理工場でオミクロン株による感染者が増加し、一部の処理工場の操業が一時停止したため、計画値から下方修正されたと考えられる。 (2) 2月・3月の処理重量は前年並みの計画値ではあるものの、新型コロナによる工場稼働への影響が全国で発生しており、工場休業や品目ごとの製造調整を実施している処理工場もあることから、銘柄・産地指定の納品先に対する欠品・調整が発生している。また、従業員出勤率が落ち込んでいる処理工場もあり、加工品や副産品(小肉・ハラミ等)の調整が今後も見込まれる。
	2. 輸入 (1) 財務省2月25日公表の貿易統計によると令和4年1月の鶏肉(原料肉)の輸入量は前月から6.9千ト減の53.8千トで、国別ではブラジルが▲6.1千ト、タイが▲0.6千トとなっている。前年同月の実績に対しては4.9千ト増となった。国内在庫の減少や、近年流行しているテイクアウト向け需要(中食)の高まりから、加工向けの引き合いが強まったと考えられる。農業畜産振興協議会(ALIC)による今後の見通しでは、2月が51.6千ト(前年比113.4%)、3月が44.1千ト(前年比79.3%)となっている。飼料・人件費・物流費等、世界的なコストの高騰、12月から1月にかけての干ばつの影響によるブラジルの減産の検討、タイにおけるASF(アフリカ豚熱)感染拡大などから輸入価格は今後も上昇し、先々では輸入量が若干絞られるのではないかとの声も聞かれる。 (2) 鶏肉調整品の輸入量は前月から5.0千ト減の43.2千トで、国別では中国が▲3.7千ト、タイが▲1.1千トとなった。前年同月の実績に対しては9.5千ト増となった。コロナ禍により工場稼働が落ちていると言われていたが、前年並みの水準まで回復していると考えられる。タイの供給体制が回復し、現在の総菜・中食需要が維持されれば輸入量が増加していくことも考えられるものの、出回り量においては過去5年間で比較しても増加していることから、輸入品在庫が急増することは考えにくい。また、原料原産地表示制度の経過措置は2022年3月末までとなっており、消費者の動向を注視していく必要がある。 (3) 1月の輸入鶏肉の価格は、前年同月より50%前後上昇し、依然として高騰が続いている。ロシアのウクライナ侵攻(両国とも穀物主要輸出国)に伴う黒海封鎖、前述のブラジルにおける干ばつ等の影響で穀物相場の高騰は避けられず、今後も高値が続くことが予測される。 (4) 安価な動物性タンパク源として世界的に鶏肉需要が増加しており、今後は日本への輸入量が徐々に例年程度へ戻ると予想する。
需要	1. 家計消費 (1) 総務省統計局発表の家計調査報告(全国・二人以上の世帯1世帯あたり)によると、令和4年1月の生鮮肉消費(購入)は数量4,469g(前年比97.9%)、金額6,474円(同96.4%)と前年を下回った。鶏肉は数量1,563g(同98.8%)・金額1,450円(同98.7%)と前月同様、前年を下回る結果となった。単価についても92.8円/100g(前年同月▲0.1円)で前年を下回った。調理食品が金額11,372円(同102.9%)、外食が11,504円(同130.3%)となっており、新型コロナの影響に伴う1月の緊急事態宣言が今年はなかった影響から内食から中食・外食へ消費が一部シフトしたと考えられる。
	2. 量販・卸 (1) 食品関連スーパー3団体の販売統計速報によると、令和4年1月の食品売上高は全店ベースで前年比99.0%と前年を下回った。生鮮3部門の売上高は全店ベースで同97.9%、既存店ベースでも同96.6%と前年を下回った。また、畜産部門の売上高は約1,171.6億円で全店ベース(同97.3%)、既存店ベース(同95.8%)とも前年を下回った。「年始は和牛など高単価商品や大型パック中心に好調に推移したが、中旬まで内食需要が落ち着き、販売数量の減少傾向が続いた。下旬からは保存の利く畜産品の需要が高まった。牛肉は、すき焼きやしゃぶしゃぶ用が低調であり、なかでも輸入牛の価格高騰が続いており、販促も打ちにくく伸び悩んだ。比較的価格が安定している国産豚肉や、鶏肉は比較的好調に推移した。ハムなどの加工肉は前年を下回った店舗が多い。」と報告された。総菜部門の売上高は全店ベース(同104.4%)、既存店ベース(同102.9%)ともに前年を上回り、高水準を維持している。「年始は帰省や集まりも増え、寿司やオードブルなどの大型パックが好調となった。中旬までは夕方以降の人流が増加し、揚げ物やフライ類を中心に夜間売上の回復傾向がみられた。中旬以降は、昼食需要や家飲み向けの焼鳥やつまみ類の動きがよくなった。週末を中心に寿司類は引き続き好調、近場への行楽や小規模イベント再開により、弁当類も好調に推移した。原料や資材の仕入れ原価の高騰を懸念するコメントがみられた。」と報告があった。野菜価格は安定しており、鶏肉を使用した総菜・加工品も増えるのではないかと期待される。
	3. 業務・加工筋 (1) 日本ハム・ソーセイジ工業協同組合調べによると令和4年1月度の鶏肉加工品仕向肉量は、前年比97.0%の4.0千トとなった。うち国内品は同95.7%の3.2千トと前年を下回り、輸入品は同102.3%の0.8千トと前年を上回った。令和3年累計仕向肉量は、同99.9%の54.1千トとなった。うち国内物は同92.9%の42.1千トと前年を下回り、輸入物は同136.2%の12.0千トと前年を上回った。
在庫	1. 令和4年1月(2022年1月) (1) (独)農畜産業振興機構の推計期末在庫では国産35.1千ト(前年比132.4%・前月差▲0.4千ト)、輸入品123.2千ト(同95.1%・同+8.9千ト)と合計で158.3千ト(同101.5%・同+8.5千ト)となった。
	2. 見通し (1) (独)農畜産業振興機構が発表した鶏肉需給表(令和4年3月7日更新)では、1月の出回り量は国産137.6千ト(前年比103.7%・前月差▲17.4千ト)、輸入品45.0千ト(同103.0%・同▲15.9千ト)と合計で182.5千ト(同103.6%・同▲33.4千ト)となった。1月以降の国産在庫については、年末に凍結した在庫の消化が進んでいないため、廉価な販売が発生する可能性がある一方で、コロナ禍による工場休業・製造調整等から供給が若干締まることから、在庫水準がさらに高くなる可能性は低い。国内の輸入品在庫の水準は一時的に増加しているものの、前述のブラジルの干ばつ、黒海封鎖、タイにおけるASF(アフリカ豚熱)感染拡大などから輸入量が絞られることが予想されるため、今後の輸入品在庫は徐々に減少していくと予想する。
相場	1. 令和4年2月動向 (1) 令和4年2月の月平均相場は、モモ肉646円/kg(前月差▲3円)・ムネ肉323円/kg(同▲7円)正肉合計で969円/2kgと前月差で10円下回り、前年差では37円下回った。モモ肉相場は月初646円、月末は639円までの7円の下がり幅であり、昨年は月初707円、月末691円の16円の下がり幅であった。需要は昨今の鶏肉ブームに加え、気温が比較的低温に推移したことによる鍋物需要等があったことから堅調な推移であり、供給は前月ほど潤沢でなかったことから、相場の下がり幅は昨年を下回ったと考えられる。ムネ肉相場は年末に凍結した在庫の消化や在庫積み増しを回避する動きから下げ基調であったが、競合する輸入鶏肉の在庫水準が低いこともあり前月から7円の下げに留まった。
	2. 見通し (1) 3月の生産量は、コロナ禍による工場稼働への影響もあり、若干減少する可能性がある。一方需要面では、気象庁発表の「向こう1か月の天候の見通し(3月)」によると、3月の気温は東・西日本で前年並みか高い予測となっており、野菜価格は安定しているものの、鍋物需要については少し落ち着くのではないだろうか。全国各地で適用されているまん延防止等重点措置により家計消費が再び内食へ回帰することも考えられるが、調理疲れから加工品・総菜等へシフトする可能性もある。以上から、モモ肉相場は2月より若干下げの月平均635円前後と予測する。ムネ肉相場は加工原料としての引き合いが依然として強いものの、12月に凍結した在庫消化があまり進んでいないため、やや下げの月平均310円と予測する。 (2) 今後、肉用鶏・種鶏農場で鳥インフルエンザが発生した場合は規模にもよるが、相場への影響も懸念される。また、輸入鶏肉については国内卸値が若干下落傾向ではあるが、生産コスト・為替・新型コロナの影響に加え国内在庫量がコロナ禍以前の水準まで戻っていないため先々を占うことは難しい。

実績

生産状況 単位:千羽、千ト、%

	R4年1月推計実績		R4年2月計画		R4年3月計画		R4年4月計画	
	数量	前年比	数量	前年比	数量	前年比	数量	前年比
入雛羽数	66,396	100.5%	59,822	101.2%	63,458	98.9%	64,233	101.2%
処理羽数	59,586	102.4%	58,197	101.5%	65,242	101.4%	62,702	101.1%
処理重量	180.2	102.7%	174.2	100.2%	195.0	100.5%	187.9	99.9%

※参考資料:㈱全国食鳥新聞社発行「PMN」

輸入動向 単位:千ト、%

品名	鶏肉			調製品			合計			比率	
	当年	前年	前年比	当年	前年	前年比	当年	前年	前年比	鶏肉	調製品
R3年8月	46.9	40.3	116.4	44.1	33.2	132.6	91.0	73.6	123.7	51.6	48.4
R3年9月	45.2	41.5	109.0	31.8	35.2	90.3	77.0	76.7	100.4	58.7	41.3
R3年10月	51.2	47.9	106.9	35.2	39.2	89.8	86.4	87.1	99.2	59.3	40.7
R3年11月	57.8	45.3	127.5	43.8	42.7	102.4	101.5	88.0	115.3	56.9	43.1
R3年12月	60.7	42.7	142.1	48.2	44.1	109.2	108.9	86.8	125.4	55.7	44.3
R3年累計	595.8	535.0	111.4	481.0	469.5	102.5	1,076.8	1,004.5	107.2	55.3	44.7
R4年1月	53.8	48.9	109.9	43.2	33.7	128.3	97.0	82.6	117.4	55.5	44.5

※参考資料:財務省「貿易統計」、(独)農畜産業振興機構「鶏肉需給表」

鶏肉の消費動向 単位:グラム、円、%

履歴	数量			金額		
	当年	前年	前年比	当年	前年	前年比
R3年8月	1,449	1,473	98.4	1,341	1,348	99.5
R3年9月	1,546	1,401	110.3	1,383	1,327	104.2
R3年10月	1,559	1,538	101.4	1,424	1,424	100.0
R3年11月	1,536	1,498	102.5	1,429	1,425	100.3
R3年12月	1,695	1,839	92.2	1,702	1,763	96.5
R3年平均	1,526	1,565	97.5	1,410	1,440	97.9
R4年1月	1,563	1,582	98.8	1,450	1,469	98.7

※参考資料:総務省統計局HP 家計調査報告(全国・二人以上の世帯1世帯あたり)

相場(年別・暦年) 単位:円

	モモ肉	ムネ肉	計
H26年	626	294	920
H27年	639	336	975
H28年	621	255	876
H29年	626	315	941
H30年	595	282	877
R元年	585	243	828
R2年	614	269	883
R3年	641	313	954

在庫状況(推定) 単位:千ト、%

履歴	国産			輸入品			合計		
	当年	前年	前年比	当年	前年	前年比	当年	前年	前年比
R3年8月	34.9	28.0	124.6	111.4	139.2	80.1	146.3	167.1	87.5
R3年9月	33.8	27.8	121.6	107.6	138.4	77.7	141.4	166.2	85.0
R3年10月	34.7	26.8	129.3	108.2	134.1	80.7	142.9	160.9	88.8
R3年11月	33.6	26.4	127.0	114.7	131.3	87.4	148.2	157.7	94.0
R3年12月	35.5	26.8	132.2	114.4	124.3	92.1	149.9	151.1	99.2
R4年1月	35.1	26.5	132.4	123.2	129.5	95.1	158.3	156.0	101.5

※参考資料:(独)農畜産業振興機構「鶏肉需給表」

相場(月別) 単位:円、%

品名	モモ肉			ムネ肉			正肉合計		
	当年	前年	前年比	当年	前年	前年比	当年	前年	前年比
R3年11月	619	654	94.6	333	302	110.3	952	956	99.6
R3年12月	641	687	93.3	340	311	109.3	981	998	98.3
R3年平均	641	614	104.4	313	269	116.4	954	883	108.0
R4年1月	649	711	91.3	330	314	105.1	979	1,025	95.5
R4年2月	646	701	92.2	323	305	105.9	969	1,006	96.3
R4年3月	(635)	691	91.9	(310)	304	102.0	(945)	995	95.0
R4年4月	(625)	678	92.2	(310)	305	101.6	(935)	983	95.1

※1-12月平均 ※()は見通し ※()は見通し